

## 《研究ノート》

## 松代藩の水道行政

——職制機構に見える支配と実態——

坂 浩 智 美

## 目次

はじめに

## 第1章 水道の成立と設置目的

## 第1節 成立年代と流域・水源

## 第2節 設置目的

## 第2章 管理の実態

## 第1節 水道奉行所・水道方・水道役所

## 第2節 『水道御役所日記』にみえる職務

## 第3節 水道管理者

むすびにかえて

## はじめに

松代藩は、信濃国の更級・水内の両郡を中心に、埴科・高井郡の一部をも領有した、外様の中藩である。武田・上杉ら戦国大名たちの支配をへて、慶長8（1603）年から一時期は徳川家康の六男・松平忠輝の支配となるも度々移封・転封が続いた。松代藩として領主の定着がみられるようになるのは、元和8（1622）年に真田信之が入封して以降であり、明治4（1871）年の廃藩置県まで真田氏の支配が続くこととなった。真田氏時代の石高は、約十万石である。

松代藩の藩政研究は真田氏の残した膨大な史料によっており、長野県や長野市による地方史誌の充実も相俟って、様々な研究がなされてきた。藩政研究の中心は、恩田奎による宝暦の改革をはじめとする財政問題が古くから行<sup>(1)</sup>われているが、藩の職制などについて研究されたものはまだ少ない。また、<sup>(2)</sup>  
<sup>(3)</sup>

法制史の分野でも刑法系についての論文は個々に出されてはいるものの、総合的研究はまだ無いといってもよいであろう。<sup>(4)</sup>

職制や行政のあり方を知る上で重要な位置にあると思われる上水についての研究はほとんど無く、唯一、『松代町史』だけがその存在を記述しているようである。江戸時代、幾つかの城下町に上水道が設置されていたことはよく知られている。江戸の神田上水や玉川上水は特に有名であるが、その他にも赤穂藩の上水や金沢藩の辰巳上水など、当時の最高の技術を持つ上水がかなり早い時期から設置されていたことも報告されている。真田氏の城下町・松代にも上水があるのは至極当然のように感じるのであるが、堀越正雄氏の『増補版 日本の上水』の中には全国30以上にも及ぶ上水が列記されている<sup>(5)</sup>にもかかわらず、松代藩の上水についての記述は無い。

しかしながら、国文学研究史料館の所蔵する『真田家文書』を調べてみると、藩政の日記・賞罰・普請などの各項目内に「水道御役所」等の記述が見られる。また、『更級埴科地方誌』内の藩の職制の中にも、「水道役」なる職名が見られることから、「水道」が存在し、それを管理する役所・役人がいたことを知ることができるのである。ただ、この「水道」とは上水道としての機能を有するものか、単なる用水としての機能を有するものなのかについての記載はまったく無い。<sup>(6)</sup>

本稿では、これまでほとんど知られる機会がなかった松代藩の水道とはどんなものであったのかについて、『真田家文書』の記述を中心に考察していくこととしたい。

## 第1章 水道の成立と設置目的

### 第1節 成立年代と流域・水源

『真田家文書目録』の中で、水道に関わる史料を調べてみると、水道御役所日記として25件、御賞について1件、藩政の普請関係資料として出てくる104件、絵図27件が見える。かなり多くの史料の存在が確認できるのであるが、史料の多くに年代記載がなく、水道の成立をはっきり示した史料も存在

しない。また、水道とは使わず、「用水」と記載されているものも多く出てくることから、単なる上水道だけをさすのではない可能性もあるように思われる。

史料のうちで年代のはっきりしたものからみると、寛延3（1750）年の段階にはすでに水道らしきものが確立していたことがわかる。絵図では2月25日のものがあるが、次にあげるものは、史料の中で最も古い7月のものである。<sup>(7)</sup>

柴町下堤北河原地之内、其方江御借地被成下候御曲輪御用水水上ニ付、  
諸不浄成もの捨入不申候様、常々心懸可申候、<sup>(虫喰)</sup>□元今般原北隼人殿・安  
藤初市殿江被仰付御改書付有之候、随分無油断御用水口可相守候、仍証  
文如件

寛延三庚午年七月

一色平八

坂口佐平太

道橋方御中間 茂右衛門 殿

この史料より以前についてははっきりしないため、いつ頃よりこの用水があったのかは判明しない。ここでは「御曲輪御用水」という言葉が使われていることから、城内に用水を引き入れていたことがわかる。

では、この「用水」はどのような地域を流れていたのでしょうか。

『真田家文書』には多くの水道絵図が残されている。

最も古いものは前述した寛延3年2月25日の「紺屋町近辺水道絵図」であるが、清須町・小六院近辺・西木町・長刀堀近辺・代官町・馬場近辺・五ヶ町（伊勢町・中町・荒神町・肴町・鍛冶町）などの個別の絵図も存在している。年代も様々であるが、絵図を見る限り、城とそのまわりの町々の多くをカバーしていることは明らかである。

絵図を見ていて気づくことは、この用水が城下町のかなりの地域に行き渡っていたこと、そして道を通る本管から各家へ引水されていたことである。本管と思われるものの上に、橋がかけられているものも見られるので、これは開渠であった可能性が高いと思われる。また、屋敷地内に引水しているも

の中、地内に「泉水」と書かれたものもあることにも注目したい。

次に、この「用水」はどこを水源としていたのでしょうか。「代官町近辺水道絵図」を見ると、「篠池」というところから水路がのびている。一方、「紺屋町近辺水道絵図」の中では、「大英寺」の脇にある溜池のようなところから引水されているようにも見える。また、「関屋川分水普請箇所絵図」では、下水の上を通った水路から幾つもの分水が出ていることも見ることができる。これらの図からすると、町内をめぐる水はひとつの水源だけとは言いがたく、複数の水源を有していたものとも考えられよう。

では、史料上はどのように記されているのであろうか。明和7（1770）年に職奉行所に出された「口上書」を見ておこう。

乍恐以口上書奉願御事

一、西条村之内新御安木町抱屋鋪之内出水堤、先年々伊勢町・中町・荒神町・諏訪町・肴町右五町之用水仕来候所、此頃旱水ニ付五丁申合右堤普請仕候、然ル処右堤江当り者無御座候得共、大勢猥ニ入込水あび、其上不浄成物を捨、土手ニ立来り候竹木伐荒シ、或ハ樋ノ口抜払殺生等仕、右堤土平式ニ往古々道無御座所諸々江罷成候ニ斗五丁之者一流迷惑至極仕候、以来右躰之狼藉無御座候様、右場所へ御立札被成下置候様五丁之者奉願候、御情ニ願之通被仰斗被下置候ハ、右札之儀者自普請ニ仕度奉願候、此段幾重ニ茂奉願上候、以上

明和七年寅六月

職御奉行所

伊勢町	役人
中町	同
荒神町	同
諏訪町	同
肴町	同

この文書によれば、「西条村之内新御安木町抱屋敷之内出水堤」とあり、これ以前からこの水が伊勢町・中町・荒神町・諏訪町・肴町の五町の用水となっていることが記されている。明和7（1770）年の6月ごろ、旱水だった

ので五町で申し合わせ堤の普請をしたのであるが、大勢が猥に入り込んで水あびをしたり、不浄な物を捨てたり、土手に入り竹木を伐採したり、樋口を抜き払い殺生まで行われていたらしい。五町の者は迷惑に感じているので、この場所に立札を設置したいという願を職奉行所へ出したものである。願を出した先の職奉行とは、人別の管轄を行う奉行である。この用水が前述した「御曲輪御用水」と同一のものであるかどうかははっきりとしないが、城下町内にいくつもの用水が流れていたとは考えにくいので、同一の用水と考えるのが妥当であろう。なお、この願いが受け入れられたかどうかを示す史料は見つかっていない。

## 第2節 設置目的

江戸をはじめとする多くの城下町では、人口増加に伴う水不足から、上水路を必要とした。松代においては、如何なる理由から用水が城下町内に引かれたのかを検討したい。

古い史料は望めないが、管理体制のわかる文政期以降の年月日と指出人・受取機関がはっきりとしている文書を主として、考えてみることにする。ここであげる文書はすべて、水道奉行所に出されたものである。

まず、文政2（1819）年の次の文書を見ておこう。<sup>(12)</sup>

### 差上申一札之御事

此度水道御奉行所方被 仰付候御事、其町御用水堰之義先役人江者度々申渡置候、然ル所今日掛り悪敷候ニ付、自分罷越致見分候、御用水口止草を以せき留候義甚不埒至極候、尤町内用水ニも用ひ候間少々者致分水候而も不苦哉、畢竟水下ニ心懸不宜者有之哉ニ付右鉢之義有之候、依而嚴敷致詮義名面等極印差出可申旨被 仰付御座候ニ付、組合一同被留呼右之趣御尋被成下候ニ付、借屋等迄詮義仕候処、答左様成義無御座候自然脇々方申上、組合之内右鉢之者御□□□如同様被 仰付候共、御恨無御座候、然上者以後相互心付可申候間宜様御取成被 仰上可被下置候、為後日組惣代連印仕差上申候、以上

文政二卯年二月

紙屋町 五人組惣代 金作（印）

同改 新五郎（印）

名主 戸佐久殿

長町人 久作殿

前書之通水下組合之者右呼厳敷詮義仕候処、前文之書面私共迄差出申候間、此度之義御見流被成下置候様奉願候、然上者以来右様之義無御座候様、急度申付置候、為後日奥印仕差上申候、以上

名主 戸佐久（印）

長町人 久作（印）

## 水道御奉行所

ここでは、用水の流れ具合の悪い原因を調べたところ、用水の水口が留めがねによって堰止められていることがわかったことが記されている。用水を町内に分水することは良いが、水下の便宜を損なうことのないよう、厳しく申し渡しがなされたのであろう、組合の者たちが連印をなした書状が出されている。「町内用水ニも用ひ」とあることから、「町内用水」は付け足しであり、本来は「御用水」として城内に入れることが目的であったと推測できるのではないだろうか。

次に、文政 8（1825）年の文書をあげる。<sup>(13)</sup>

## 乍恐以口上書奉願候御事

一、表柴町差口私抱屋敷之内江今度以御<sup>(虫喰)</sup>口内水用水仕度奉願候、尤不浄之悪水等入不申候様可仕候、内水落口之義者其場所元川筋江落シ、旱水之節者被 仰付次第内水相止候様可仕候

御情願之通被 仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、以上

文政八年十一月

伊勢町 願人 傳兵衛（印）

西木町 肝煎 源治（印）

## 御水道御役所

これは、伊勢町の町人・傳兵衛が表柴町にある抱屋敷内に用水を引き入れたいという願書である。用水を引き入れた際には、「悪水」が用水に入らな

いよう注意し、内水の落口は元の川筋へ戻し、旱水の時には内水の引き込みをやめるという条件を提示している。

(14)  
次の文書は天保8（1837）年の文書である。

乍恐以書付奉願候御事

私儀此度当屋舗之内七堰ニ而通候御曲輪御用水之内、分ケ水ニ而取申度隣家不殘遂合候処、何ニ而茂差支無御座由ニ付御願申上候所、以御情御聞濟被成下置有難仕合奉存候、然ル上者水入口出口等兼而々差障水末指問無之様取り斗、其上塵芥洗濯物等浸シ不申悪水流込無之様、且旱水等ニ相成候ハ、右分水相留本川江流シ御用水差支無之様隣家相互申合可用水仕候、為後日仍而如件

天保八酉年八月

西木町 願人

忠左衛門（印）

水道御奉行所

これは、西木町の町人・忠左衛門が、自分の屋敷内を通る「御曲輪用水」を分水したいという願いである。隣家とは話し合いを済ませ、何れも差しかえがなかったので上申したものである。願いは了承されたようで、分水の入口・出口などで水が滞ることのないようにし、塵芥や洗濯物が浸ることによって出る悪水が用水に流れ込まないよう配慮し、旱水の時は分水を留めて、元の川へ戻し、「御用水」に支障のないようにすることが申し合わされている。

(15)  
また、天保14（1843）年には次のような文書も出されている。

乍恐以書付奉願候

御曲輪御用水揚口山越嘉膳様門前、文政年中御普請御座候後、是迄御手入不奉願等閑仕罷在候処、去ル天保十三寅年五月中大水ニ而右七堤押流御曲輪御用水揚り不申候ニ付、水上ニ罷在候西木町軒別明俵縄杭石等持出、砂利寄急防仕、其段御役所江申上候所、右急難防仕候儀ニ付、先此度ハ組合申含置候様被 仰聞、近々御普請可有之ニ付其節者勘弁可仕之趣被 仰含ニ付差扣罷在候、殊ニ当七月中文政之度被 仰出候用水之路故、塵芥掛り居候而者虫を生し候之趣、呑水用候而者人々病茂差免之儀、

難有仕合御憐愍被 仰付候而者、乍恐大勢之者共奉存趣も申上候  
(後略)

天保十四年卯九月 傳兵衛抱屋敷 役代 周三郎(印)  
組惣代 忠左衛門(印)  
元治(印)

### 御水道方御役所

これは、前述の文政8年の文書に出てきた、伊勢町の傳兵衛の抱屋敷でのその後の一件である。山越嘉膳の屋敷は木町の脇にあり、御曲輪の用水揚口として重要な場所であったと考えられる。用水揚口は文政年中に普請を行って以来、手入れが行われなかったようだが、天保13年の大水で七つの堤が押し流されて御曲輪御用水の揚りに不都合が生じるようになったため、水上にある西木町の者がいろいろな道具を使い、急遽普請をして乗り切った。このため、近々普請がある時には、手伝いなどは勘弁してもらいたい旨が出されていた。が、「用水」であるから塵芥が入るようなことがあると、虫が発生する可能性があり、病気になると困る旨も書かれている。ここで史料中に「呑水用」とあることから、用水は飲料水としても使用されることもあったことが確認できよう。

また、次にあげるものは年度は不明だが、用水のあり方をはっきり述べた文書<sup>(16)</sup>の存在を示すものである。二例をあげる。

- A. 御泉水掛り減水ニ付、各様用水暫之内、湯本三左衛門殿屋敷脇ニ而致分水、竹山町江引入申候、左様御承知可被成候、此段得御意候、以上

七月十日

佐藤三九郎

水野房五郎

- B. 御泉水懸り旱水ニ付、各様御用水暫之内、湯本三左衛門殿屋敷脇ニ而半途々分水致、竹山町江引入御泉水江懸込申候、左様御承知可被下候、且右之趣御長屋者御家来江も事々被仰付置可被下候、此段得御意候、以上

七月十八日

宮沢 丹下



## 小林奥左衛門

Aは減水になったと述べ、Bは御泉水が旱水になったと述べているが、どちらにせよ町内を流れる御用水を分水して御泉水に入れることとしている。湯本の屋敷は武家地内にあるが、松代城からはかなり離れている。竹山町を経由して御泉水に引水するルートをとっていたのであろう。また、Bの史料でこの旨を長屋の者や家来にまで周知させることを求めていることも、城内へ入れる水が町中を通っており、藩の管理下にあったことを示しているものと思われる。

以上にあげた史料から、この用水の設置目的その他について、次のような点が指摘できよう。

- ①この用水は「御泉水」して城内に引き入れることが主目的で設置されたこと。御泉水が渇水の場合は、各種に用いられている用水は用水へ引く前で分水し、泉水へ入れることもなされた。
- ②「呑水用」という記述から、飲料の目的があったこと。
- ③各屋敷内を流れた「内水」の残り（未使用の水）は、元の上水へ入れることとなっていたため、塵芥や洗濯物などを水に入れないよう注意し、水質の保全に努めていた形跡が見える。このような注意を要したことから、「内水」は開渠が多かったのであろう。町中を流れていた用水も開渠であった可能性が高い。
- ④旱水の際は「内水」の引き入れをやめていたこと。

以上のような点を見ると、松代の「用水」は飲料の目的も持っており、塵芥等の混入を防ぎ、水質保全を揚げていることから、「上水道」としての役を担っていたものと考えらるべきであろう。また、未使用の水は「元川筋」へ戻すが、松代の城下は神田川・関屋川のあいだに形成された町であるので、最終的にはこの川へ排出されていたと考えられる。

## 第2章 管理の実態

### 第1節 水道奉行所・水道方・水道役所

松代藩の職制を記した『更級埴科地方誌』によれば、松代藩の水道に関わる役職として、安政6（1859）年及び慶応年間（1865～68）に「水道役（定

表1 水道関係役所名称リスト

年 月 日	役 所 名
1. 明和9(1772).3	水道御役所
2. 寛政8(1796).4	水道奉行所
3. 文化12(1815).6	水道奉行所
4. 文政2(1819).2	水道奉行所
5. 文政8(1825).11	水道御役所
6. 文政9(1826).10.15	水道役中
7. 天保5(1834).4	水道奉行所
8. 天保7(1836).4	水道奉行所
9. 天保8(1837).8	水道奉行所
10. 天保10(1839).7	水道奉行所
11. 天保14(1843).9	水道方御役所
12. 嘉永5(1852).2	水道方御役所
13. 万延元(1860).4朔	水道奉行所
14. 不明 4	水道奉行所
15. 不明 6	水道奉行所
16. 不明	水道奉行所
17. 不明 4.18	水道方御役所
18. 不明 2	水道御役所
19. 不明 5.29	水道方
20. 不明 5.29	水道方
21. 不明 6.13	水道方
22. 不明 6.14	水道方
23. 不明 6.21	水道方
24. 不明 6.29	水道方
25. 不明 8.5	水道方
26. 不明 7.17	水道方

員3)」なるものが存在していた。また彼らの配下には「水道方仲間（組之者がつく。定員3)」、「水道小屋番（在郷の足軽クラスがつく。定員3)」<sup>(17)</sup>がいた。

しかしながら、『真田家文書』の水道関係文書を見的过程中、「水道方」とは違う名称で記されている例を目にした。最初に気になったのは、「水道奉行」という役職であった。『真田家文書目録』には、「水道奉行廻状」というタイトルで10文書が表記されている。『目録』内で「水道奉行」と表記された文書史料に共通することは、個人の名前が列記されるだけで、「水道奉行」という役職名は全く出て来ないことである。そのため、「水道奉行」という役職が存在したかどうかについては、確認がとれないのが現状である。

一方、「水道奉行」ではなく「水道奉行所」という名称は、はっきりと文書内に出ている。前述した文政二年の文書などはその例である。この奉行所<sup>(18)</sup>

は、一時期だけ存在したのか、行政の統廃合の折りに改廃されたものなのか、はっきりしない役職であるので、この名称がどの程度使用されているかを明らかにしておく必要はあるかと思う。

前頁の表1は、文書が出された先の役所を一覧したものである。全部で26件であるが、この中で「水道奉行所」なる名称が使われたのが11件、「水道方御役所」なる名称が使われたのが6件、単に「水道方」という名称が使われたのが9件である。年代の不明なものを除けば、明和以降に、使用されているため、一時期だけ存在したものとは考えにくく、行政の統廃合による改廃があって名称変更がなされたものとも考えられない。文書について言えることは、「水道奉行所」宛となっているものは町人町から用水の引水を願うものとして出されたものである。当時このような名称の役所があったかは判然としない。「水道方御役所」及び「水道方」については、例年出される廻状のようなものや、家老からの仰渡書、そして水不足のために引水を願うものとなっている。古地図で「水道奉行所」なるものは見られないから、「水道を統括する役所」、イコール「水道奉行所」という使われ方がなされていた可能性もあろう。

## 第2節 『水道御役所日記』にみえる職務

水道に関する史料が多数あることは既に述べてあるが、管理の実態をトータルに知れるものは少ない。一連の史料の中で、「水道」の仕事がわかるものとして、役所の日記から当時の様子を考察してみたい。

水道関係の役所日記は、『水道御役所日記（天保13年）』と『水道方御用日記（嘉永2年）』の二つを見ることができるが、ここでは古い方の『水道御役所日記（天保13年）』を例にあげたい。

『水道御役所日記（天保13年）』は完全な業務日誌である。表紙には当番として水野房五郎・堤右衛門の名が記されている。各月の冒頭には、御用番・御勝手方・当番がそれぞれ記される。天保13年の各月の担当者をまとめたものが、表2である。

表2 各月の担当者

月	用番	勝手方	当番	備考
1	恩田 奎	恩田頼母	水野房五郎	
2	大熊 鞠負	恩田頼母	堤右衛門	
3	青木 数馬	恩田頼母	水野房五郎	
4	望月 主水	恩田頼母	堤右衛門	
5	恩田 頼母	恩田頼母	水野房五郎	※
6	恩田 奎	恩田頼母	堤右衛門	※
7	大熊 鞠負	恩田頼母	水野房五郎	
8	恩田 頼母	恩田頼母	堤右衛門	
9	恩田 奎	恩田頼母	水野房五郎	
10	望月 主水	恩田頼母	堤右衛門	22日より
11	恩田 奎	恩田頼母	水野房五郎	
12	恩田 奎	望月 主水	堤右衛門	

※5・8月は「御用番御勝手方」という記載である。

用番、及び水道当番は月番制をとっていたことがわかる。この他、水道方支配の仲間、見分を行う目付・目付加役や小頭など、水道に関わった者の名を多く見ることができる。

次に、勤務内容について見てみると、「水道御役所」の名の通り、水道に関する様々な業務をこなしている。

まず2月14日には、「水道蓋板三十間、御普請方江申談請取置、近々手入仕度段御勝手方江申立、御聞済ニ付、御普請方江申談置」という記述があり、普請の際には御勝手方と御普請方の間にたっていたことがわかる。

例年3月には、廻状・名面帳を回すとある。水道史料には多くの廻状史料が存在しているが、ほぼ同文のものは3月に回した廻状と考えられる。この廻状であるが、天保13年のものは見つからなかったが、各年ほぼ同文のものが出されているので、少し長文で年代が不明であるが、3月に出されたもの<sup>(21)</sup>を例として次にあげておく。

例年之通銘々屋敷境堰曲根等有来之通相糺、門前名垣損并道普請致、中高ニ道筋地形々高キ石無之様無油断其時々致繕、往来橋等ニ至迄前々之

通相糺、屋敷囲等出張無之様、帯々見苦敷無之掃除等迄心付、内水取候ハ、不致取捨ニ従、入口出口共ニ往来本川江流シ、水入口出口共ニ往来江不差障、尤用水之内江塵芥洗濯物等を浸シ不申、悪水流込無之様、勿論旱水等ニ相成候節者、内水相止本川江流シ、水下難渋無之様用水ニ候様申合せ、隣家相互致吟味、尤屋敷替或者屋敷地面御年貢附ニ相成、又ハ裏門新規口明替之類并表囲長屋塀前々之通有来之所、損普請手間取之儀有之候ハ、不見苦敷様取繕置、其趣水道御役所江御改可被成候、其儘早速出来候ハ、不及御改候、右道普請往来橋等近年手入鹿末ニ相成候場所茂る有之候、以後損次第被仰合、前々之通早速御繕置可被成候、右之趣相触、自然鹿末之儀見懸候ハ、厳敷可相改之旨、用水相通候場所者屋敷川迄茂、右年々水筋御目付立合を以、三月々四月迄之内明細致見分候間、左様御心得可被成候、

右之段御用番被仰渡候、以上

三月

掃除の徹底、用水に対しての塵芥投入・洗濯などの禁止を申しわたしている他、旱水の際は内水をやめて本川へ流すことなど、用水管理に対して重要なことを述べている。また、修繕については「水道御役所」が改めることが記されている点も興味深い。

4月には2・3・4日と3日間にわたって家中の用水を見分している。

8月9日には「御泉場水減ニ付汲取之義、長国寺副寺時ハツタ頼申来候ニ付、水懸致詮議候処、小山田藤右衛門前分水場々寺内江懸樋埋有之候ニ付、右水筋堰浚江致候様、還右衛門を以副寺江申遣候、此分水場先例長国寺持ニ御座候」という記述がある。御泉水が減水したため調査したところ、小山田藤右衛門前の分水場から寺内へかかる樋が埋まっていたので浚を行うこととし、還右衛門（小頭・柳沢安右衛門の配下の者）を申遣したのである。8月は頻繁に水不足による渇水となっていたことは他の文書にもよく出てくるが、これもその一つであろうか。

一方、冬を控えた10月29日には、「雪堰壺枚御用立不申候ニ付、御普請方

江申談受取申度旨、且又水道樋蓋板之義、損場所手入仕度ニ付御普請方江申談、松板請取申度旨御勝手方江伺候処、御聞濟、同日々御泉水懸手入初、松板拾間御普請方々受取」という記述が見られる。雪対策として「雪堰」が必要だったことを示すものである。翌11月9日にも「大雪搔耄枚御普請方江懸合置」という記述がみえる。

この他のものとしては、火災後、焼失場所改を行っていたことがあげられる。<sup>(22)</sup> 次の史料がその一例である。

一、二日夜九ツ半時過出火坂野安左衛門居宅其外焼失ニ付、例之通御役所江相詰、翌朝六ツ時過焼失場所改之義、御普請方江懸合、其上引取之節、御用番江罷出改之儀ハ、明日可申上旨申上置、翌朝六ツ時過出役左之通

水野房五郎

堤 右兵衛

(後略)

坂野安左衛門の居宅その他と、隣接する中村小治郎の表囲塀など一部が焼失した火災であったが、火災当夜は役所に詰めており、翌朝になって焼失場所の改めを行っていることがわかる。改めには大工・小頭を連れていっている。改後は普請方へ懸合を行っている。

この年は5月・6月・9月にも火災があったが、5月には水野・堤の他、小泉弥兵衛なる者が出役している。ところで、この火災の際の改出役については月番制ではなかったようで、水野・堤は両者共出役していたようだ。そのためか、6月（この時は月番でもある）・9月の火災の際、出役をしなかった堤については「(六月)廿五日、清野村ニ而出火、右兵衛腹病ニ付不罷出、御目付江改」、「(九月)廿七日夜出火之節、右兵衛腹病氣ニ付不罷出、御目付江断」という記載が見られるのであろう。

以上、水道役の当番の仕事は、①廻状・名面帳の作成、②普請の際の差配、③出火後の改出役などを日常的に行っていたと思われる。この仕事内容からすると、江戸幕府での普請奉行の職務内容に近いことが言える。松代藩の職制内において、「水道役」は他の多くの役職と共に家老の下に位置していた

ようであるが、職務内容的には普請奉行の補佐をつとめていたのかもしれない。

ところで、前述した『更級埴科地方誌』の水道に関わる役職は、安政6（1859）年及び慶応年間では「水道役」の定員は3名であった。天保13（1842）年の日記では、5月の出火後の改出役以外では水野・堤の2名しか出てこない。また、ここではとりあげなかったが、嘉永2（1849）年の『水道方御用日記』では、当番として山本権平・三輪徳左衛門の2名のみが月番で業務を遂行していたこともはっきりしている。とすると、嘉永3（1850）年以降に制度が改められたのかもしれない。

### 第3節 水道管理者

では、松代藩において水道管理を行っていた人たちは、どのような者であったのだろうか。

原島陽一氏は、『真田家文書』には、歴代の役職表のような整備された史料は残っていない」として、「真田家家中明細書」をもとにした、松代藩の役職就任記事の抽出を行っている。原島氏の抽出した人物以外にも、文書内<sup>(23)</sup>から水道関係の役職に従事した者を見いだすことはできる。これらの者を年代が把握できたものを中心にできる限りあげたものが、表3である。

表にあげた27人のうち、『真田家家中明細書』内に「水道方」の役人として名が載せられているのは14人だけで、残りは文書内から抽出したものである。文書自体に年代記載のない者も多いため、不完全なものとなっているが、その中でもいくつかわかったことがあるので、その点をまとめておく。

まず、水道役になる前は、その多くが「御番」であったことである。14人のうち実に9人が「御番」であり、その他のものとしては「御宮見廻役」が2人、あとは1人だけのものとして大殿様御近習・若御前様御奥支配、全く何もしていない（記載なし）があげられる。「御番」は当然、番方と考えられ、水道役は番方の加役的な側面があった可能性が指摘できるかと思う。次に水道役の後はどうなったかという点、「御城廻」が3人で一番多く、次の

表 3 水道管理者一覧

就任年代	人 名	前 職	後 職	真田明細	備考
寛延 3 年(1750)	一色平八	不明	不明	不明	
寛延 3 年(1750)	坂口佐平太	不明	不明	不明	
明和元年(1764)	宮下嘉平太	不明	不明	不明	
明和元年(1764)	石野傳藏	不明	不明	不明	
寛政12年(1800)	平林縫殿進	なし	御城廻	269頁	★
享和 3 年(1803)	竹内小左衛門	御番	御城廻	189頁	
文化11年(1814)	瀧沢音人	不明	不明	不明	
文政 5 年(1822)	宮下丹下	大殿様御近習	御城廻	311頁	
文政 8 年(1825)	小林奥左衛門	不明	不明	不明	
文政 8 年(1825)	佐藤三九郎	御番	不明	141頁	★
文政 9 年(1826)	水野房五郎	御番	御蔵奉行	303頁	★
天保 7 年(1836)	山元権平	御番	御番	351頁	★※
天保11年(1840)	西村源藏	若御前様御奥支配	弘方御金奉行	237頁	★
天保12年(1841)	堤 右衛門	御宮見廻役	表御右筆組頭	204頁	★
天保14年(1843)	伊藤佐右衛門	御宮見廻役	記なし	15～16頁	★
嘉永 2 年(1849)	三輪徳左衛門	不明	不明	不明	
安政 3 年(1856)	三井栄助	御番	御警衛方御番士	298頁	★
安政 6 年(1859)	村田新五兵衛	御番	御奥支配	324頁	★
慶応 2 年(1866)	水野瀬平	御番	御番	303頁	★
慶応 2 年(1866)	宮沢新八郎	御番	勤仕並	310頁	★
慶応 3 年(1867)	関口隼太	御番	勤仕並	174頁	★
不明	塩野完尔	不明	不明	不明	
不明	金井彦右衛門	不明	不明	不明	
不明	相澤島右衛門	不明	不明	2 頁	
不明	湯本十学	不明	不明	352頁	
不明	落合量藏	不明	不明	不明	
不明	谷口民馬	不明	不明	不明	

凡例 1. 真田明細とは『真田家中明細書』をさす。

2. 備考欄に★がある人物は、原田陽一氏の「真田家役職一覧」に名前があった者をさす。

3. ※の山本は、弘化 4 年以降もつとめている。



で「御番」と「勤仕並（明治期のみ）」が共に2人ずつとなっている。その他としては御蔵奉行・払方御金奉行・表御右筆組頭・御警衛方御番士御奥支配などがあげられる。もとの「御番」に戻ったケースよりも他の役についている例が多く見られることが何を意味するのか、この少ないデータでは推測しにくい。

高については、役料・切米・扶持と様々な立場となっており、藩内において有力な役であったとは考えにくい。また、史料上では水道管理者として重要な地位を占めていたと考えられる者が、『家中明細書』に記載されていない例が多数存在していることから、藩内で役としての格はそれほど高いものであったとは考えにくい気がする。これについては、今後他の奉行職や役などの研究を進めていく上で更に考察していく必要があるものと思われる。

### むすびにかえて

松代藩の水道研究の契機は、国文学研究史料館の『松代真田家文書』の中に「水道」と銘打たれた文書群が多数存在しているにもかかわらず、上水の研究書などには全くその存在が記されていないことに疑問を持ったからであった。偶然にもNHKの報道の中で、松代ではかつて「御泉水」というものがあったことを知ったことも、無関係ではない。

松代藩の上水道がいつ出来上がったのか、正確なところは結局は不明である。しかし残された多数の文書を見る限り、寛延の頃には絵図が描かれていることから、出来上がっていたことは確かであろう。廻状を出すなどシステムが整ったのは、その後の明和の頃と思われる。水源については、複数の水源を使用していた可能性が強い。設置目的が明確に示されたものはないが、「御曲輪御用水」や「(御)泉水」などの呼び方から、城内への引水が主目的であり、その他では塵芥などを入れないよう注意をしている上、時には「吞水」とも表記されているから、飲用されていた可能性もあると思われる。

このような上水道としての機能を持つ「水道」を管理していたのが「水道役所」又は「水道方」であった。その管理方法については『水道御役所日

記』などに詳しく記載されており、御用番・御勝手方・当番が責任者として名をつらねるが、実際の業務は水道当番が月番交代で従事していた。水道当番は廻状・名面帳を回し、家中の用水を検分する他、普請時の差配を行い、また火災後の焼失場所改などが日常業務として行われていたようである。水道役に就く者は、番方からの者が多い。藩士の地位からもそれ程高い役とは考えられない。

今回は職制と管理の側面からのみ考察したものであり、上水研究としてはまだその端緒である。中でも本論文では管理の主体を研究対象としたため、その他のことについてはあまり触れていない。多数残されている普請帳などを利用して、どの程度の規模の工事がなされていたのか詳細に検討し、どのように管理・運営がなされていたのかを明らかにすることによって、より多くのことが判明するものと思われるが、これは今後の課題としたい。

更に、多くの絵図が残されているものの、『松代町史』<sup>(24)</sup>などにもその図はほとんど活かされていないという現実がある。本論でも絵図史料については参考とはしたが、その全貌を確認するまでには至っていない。城下町内全体の水路を把握する上でも、今後、詳細な調査を行う必要があると思われる。

また、文書の中には引水をめぐっての紛争記録も残されていたが、これについては本稿では扱わなかった。紛争とその処理については、いずれ機会を改めて論及することとしたい。これは今後の課題でもある。

今回の研究に関連して長野市の埋蔵文化財センターで上水樋と思われる遺物を見せていただいたり、30年以上も前の道路工事の際に出たという上水樋を水道局の資料館で見せていただいた。調査中のものも多数あり、考古学的な考察が行われるのは先であるが、いずれその結果も含め、更なる考察をしたいと考えている。

(1) 現在、真田家の史料は長野市松代の真田宝物館と東京の国文学研究資料館に収蔵されている。

(2) 財政改革を含めた藩政改革についてまとめられた論文は、西沢武彦「松代藩における恩田奎の改革」(『信濃』Ⅲ次8巻11号、1956年)、宇都宮正喜「近世後期

松代藩財政について」（『長野』107号，1983年），田中薫「松代藩寛保期から宝暦期における改革についての覚書き」（『信濃』Ⅲ次37巻3-5号，1985年）などがあげられる。

- （3） 職制関係では，西沢武彦「松代藩の足輕（同心）について」（『信濃』Ⅲ次6巻10-12号，7巻2-4号，1954～55年），米山一政「松代領口留番について」（『信濃』Ⅲ次7号5号，1956年），松本史「松代藩口留番所について」（『信濃』Ⅲ次39巻9号，1987年）などがあげられる。
- （4） 松代藩の刑法については，平松義郎「御仕置御規定」（『藩法集5 諸藩』創文社，1964年）。同「藩法雑考（1）松代藩『御仕置御規定』」（名古屋大学法政論集20-21号，1962年）は松代藩の刑事判例集を使った事例研究である。
- （5） 新人物往来社，1995年。
- （6） 「史料館所蔵目録」（「信濃国松代真田家文書目録 その1～4」）

なお，註（7）以降では真田家文書目録・八田家文書目録を使用したものについては，国文学研究史料館での請求番号を記す。

- （7） 真田家文書目録 さ116
- （8） 真田家文書目録 さ1158
- （9） 真田家文書目録 さ1156
- （10） 真田家文書目録 さ1160
- （11） 八田家文書目録 あ545
- （12） 真田家文書目録 さ91
- （13） 真田家文書目録 さ68
- （14） 真田家文書目録 さ96
- （15） 真田家文書目録 さ92
- （16） A・真田家文書目録 さ109，B・真田家文書目録 さ108。なお，表3を参照すると，Aは文政9年から天保7年ころまでの史料，Bは文政5年か6年のものと思われる。
- （17） 『藩史大事典』第3巻・松代藩392～393頁
- （18） 前掲註（12）
- （19） 真田家文書目録 あ3358
- （20） 真田家文書目録 あ3359
- （21） 真田家文書目録 け1811
- （22） 前掲註（19）内，四月二日記
- （23） 史料館研究紀要第18号 1986年
- （24） 『松代町史』上・下 長野県埴科郡松代町役場 1929
- （25） 真田家文書目録 さ171～177